

## 「どうする」の時代

本年度のNHK大河ドラマは「どうする家康」。私も初回から楽しく見ている。番組プロデューサーによれば「毎回ピンチが降りかかり、その都度何とか切り抜けたり、時には失敗することもある」という脚本家の構想から、このタイトルに行き着いたという（「シネマトゥデイ」）。確かに、先日の放送でも、家康は妻子が残る今川氏側＝駿府に戻りたい、しかし家臣らは織田側につくよう進言する。このはさまにあつて、悩み、葛藤する様子が描かれていた。まさに「どうする」の状況である。

時代にあったテーマだと感じる。いま、多くの人があらゆる場面で「どうする」に悩んでいるのではないか。先の見えない時代とは、お決まりの解決策が消失している時代である。逆にいえば、その都度、異なった「選択＝決断」が要求される。だが決断は意外に難しい。ドラマが描くように、決断はある人々を救うが、別の誰かは救えない。全てがうまくいく決断はない。だからこそ決断は難しいだけでなく、恐ろしい。今回のドラマの見どころである。

一方、「グリーンナイト」（D・ロウリ＝監督）という映画では、また別様の決断のあり方が描かれる。主人公は偉大なアーサー王の甥だが、武功も何もない「ヘタレ」の騎士だ。彼はその状況を望まず、自らの名声を得ようと危険なゲームに乗ることを決断し、未知なる世界への旅に出る。

だが彼は旅の終わりに気づくのである。この危険な旅の行き着く先は、自らの名声を得るだけというところに。旅立ちへの決断は彼個人のプライドのためであり、民の幸せには何も関係がない。むしろ為政者のプライドを満たすだけの決断は戦争につながり、民に苦しみをもたらすことが映画のエンディング近くで示唆的に描かれる。

さて、この二つの物語では決断の難しさ、恐ろしさ、そして「誰のための決断か」が問われている。最近、現実の政治では「決断」の語が連発されているようだ。こつしたフィクションからの教えは、現実の政治に活かされているのだろうか。

（静岡文化芸術大教授）